オーロラさんの館

愛のムチ

作者　フルーツとタルト

M.I

愛のムチ

それは一瞬の出来事だった。
『ドカッ』
「いてぇーーーー」
自宅マンションの階段で背中を押されて転び、顔面強打！
鼻がもげたか！？
血が溢れるのを抑えようと思わず顔を覆った。
マンションの絨毯を汚したらヤバイ！
顔の中央が熱くなり、激痛で気が遠くなりなりそうになる。
やっとの思いで自宅にたどり着き、そのままベットに倒れこんだ。

今日はco le jinsei に野菜と果物の配達だ。
噂では聞いているオーロラさんの評判。
見えない世界がどーしたとか・・・そんなコトは自分は信じない。
でもあの日の出来事は自分の中でも疑問だ。
思い切って聞いてみるか・・・笑われるかな・・・。

配達に行くと、オーロラさんとオレオは庭先に出ていた。
かごを抱えたオーロラさんは、蝶や蜂と一緒に
ハーブガーデンのタイムやローズマリーを摘んでいる。

「毎度様ですー！青竹青果店でーす。」
「おはよう！いつもありがとう！あら、青竹くん、あなた顔どうしちゃったの？腫れてるの？男前が台無しじゃないの～」

「はあ、それが・・・・オーロラさん、ちょっと聞いてもらいたい話があるんですが・・・」
「なに？どうしたの？そこに、掛けて。」
オーロラさんの摘んだハーブの香りが緊張をほぐしてくれる。

「実は先日、自宅マンションの階段を上がっている時、背後から凄い力で背中をドカッと押されたんで、勢い余って転んだんです。顔面から転んでしまって鼻がもげ たかと思うほどの衝撃だったんです。
顔の中心が熱くなって血が溢れ出るのを抑えようと手で覆って自宅まで戻り、その日は余りの激痛にそのまま布団に倒れこ んだんですよ。」

「病院には行かなかったの？」

「それが、まったく血は出なかったんです。マンションの床を汚さないようにと思って慌てて手で押さえたんですが・・・。ただもう痛くて、失神寸前で、病院に行くどころじゃなくって」

「でも、疑問なんですよ…凄い力で押されたんですが、そんな人影はなかったんです。それに、あんな転び方をするか？って、普通なら手で支えたりすると思うんですが、手も出なかったんですよ。特別変わったことをしていたわけでもないんですが」

「それは普通じゃなかったわね」

オーロラさんはオレオを撫ぜながらしばらく目を閉じた。

「あー、はい、これはお知らせでした！青竹くんの守護神が仕事のコトや家長としての役目をしっかり果たしなさい。しっかりしなさい！！って言いに来たのね」

「守護神・・・？お知らせ？」

「そうよ～青竹くんは毎日を、なんとなく、まあいいかって目的もなく過ごしてるでしょ」

「はあ、、日々代わり映えのない平坦な毎日です」

「それで良いと思うならそれでも良いのよ。でも青竹君の守護神は、家長としての責任を果たしなさいって。忘れている目標があるんじゃない？」

「・・・・・・・」

「思い出すことあるでしょう」

「あっ、そうです。やりたいことがあったんです！」

「良かったじゃない、ちゃんと思い出せるように教えに来てくれたんだから。青竹くんに期待してるのよ。」

「ちゃんと考えます！」

「そうよ。実現に向けて努力を惜しまないこと。怠けるとまたお知らせをいただくわよ」

「もう、痛いのは嫌ですよ！」

「それにしても、ちょっと痛過ぎたわね。痛くないお知らせ方法はなかったのかしらね～」
と、笑いながら頷いた。

我々には目に見えない世界の守りがあると聞いたことがる・・・。
不　思議とオーロラさんの話は信じられる気になった。なぜって、本当に痛めつけようとしたのではないとも分かるからだ。その証拠に顔面強打はしたが鼻は折れて　いない。小鼻に沿って深い切り込みが一本入っただけ。どうりでもげるほどの痛さだったわけだ。目に見えない世界とやらを身近に感じた瞬間だったのか。

自分には目標があったのだ。それを思い出せ！！役割を果たせ！！という激励ってことか
だが、痛すぎるぜっ・・・。
今度はもっとお手柔らかに頼みたいものだ。

「そう言うことよ、青竹くん。頑張りなさいよ。さぁさぁ早く運んでちょうだいよ～！」
「青竹君の筍はピカイチなのよ～」

オーロラさんの館
愛のムチ

http://p.booklog.jp/book/77100

著者：フルーツとタルト
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/fruitandtart-5/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/77100

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/77100

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ